

金沢市牧山町で採集された熊野神社の瓦について

松永 篤知

金沢大学資料館

〒 920-1192 石川県金沢市角間町

要約：金沢市牧山町熊野神社で使われていた瓦類 3 点について、日本考古学研究者の視点から観察した。実測図や 3D 画像も作成しながら当該瓦資料の特徴を捉えた上で、歴史的・文化的にどう位置づけられるのかを評価した。いずれも赤い鉄系釉がかかった赤瓦の類で、2 点が若葉跨鬼、1 点が面戸付き棟巴瓦に分類できた。時代（年代）としては、個々の特徴や熊野神社の由緒等から判断して、3 点とも近代（20 世紀前半）の位置づけが考えられる。

これらは、埋蔵文化財として扱うには年代が新しいが、牧山町の地域文化史の上では十分に歴史的・文化的価値を持つものと言えよう。近世以降の越前や加賀で知られる赤瓦を選択していることだけでも、使用当時の状況を示しており、注目に値する。

キーワード：瓦、牧山町、熊野神社、鬼瓦、巴瓦、赤瓦

A Report on the Roof-Tiles of Kumano Shrine Discovered at Makiyama, Kanazawa

MATSUNAGA Atsushi

Kanazawa University Museum

Abstract: I observed three roof-tiles of Kumano Shrine which discovered at Makiyama, Kanazawa. In this article, I evaluated their historical and cultural values by real measuring and 3D scanning. As a result, It was cleared that all of the roof-tiles were akagawara/red roof-tiles, two of which can be categorized as wakaba-matagioni and one as a mendotsuki-munetomoegawara. Judging from the individual characteristics and the history of Kumano shrine, all three are considered to be of the modern era (early half of 20th century).

Although they are too new to be treated as buried cultural properties, they are of sufficient historical and cultural values in terms of the local cultural history of Makiyama. They are akagawara/red roof-tiles, which known from the early modern period in Echizen and Kaga regions, so very worthy of note.

Keywords; roof-tile, Makiyama, Kumano shrine, onigawara, tomoegawara, akagawara/red roof-tile

はじめに —資料調査の経緯—

平成 31（2019）年 4 月 5 日、筆者は、金沢大学資料館長（当時）である奥野正幸先生から相談を受け、金沢市牧山町熊野神社で使われていた瓦類が金沢大学名誉教授の田崎和江先生のグループによって採集されていることを知った。より正確に言えば、熊野神社の屋根修復後に放置された鬼瓦 2 点と巴瓦 1 点である。

筆者の専門は日本考古学、特に縄文時代の編物を中

心に研究しているが、これまでに何度か近世・近代遺跡の発掘調査に携わったこともあり（注 1）、それらの調査において出土した瓦類を扱った経験もそれなりに有している。そこで、当該瓦資料がどのようなものか、個人的な興味もあって資料調査することを引き受けた。

本稿では、牧山町で採集された熊野神社の瓦について、日本考古学研究者の視点から観察所見を述べることにする。当該瓦資料の特徴を捉えた上で、歴史的・文化的にどう位置づけられるのか、筆者なりに評価してみたい。

熊野神社について

当該瓦資料について詳しく見る前に、これらの瓦が元々使われていた熊野神社について簡単にまとめておこう。

熊野神社は、石川県金沢市牧山町へ1に所在する。この牧山町は、河北潟に注ぐ森下川（大野川水系の二級河川）の上流に位置し、自然に恵まれた里山地域である。熊野神社は、森下川沿いの一段高くなった場所に立地し、その祭神は伊弉冊岐尊（いざなぎのみこと）・事代主神（ことしろぬしのかみ）である（図1）。その由緒をたどると、明治42（1909）年に日吉社・八幡社・恵比須神社・平野社・白山社を合祀して村社直江谷神社と改称したことに遡り、その後大正4（1915）年に少彦社を合併、昭和27（1952）年の宗教法人化にあたって熊野神社に改称して現在に至るという（注2）。この由緒の中で特に注目すべきは、明治末の神社合祀期に5社が一つとなって創建された村社を起源とすることである。これは、逆に言えば当地域におけるこの神社の重要性を示している。

神社としては新しい部類であるが、それでも一世紀を超える歴史があり、今でも牧山町の地域において大切な存在と言える。

なお、現在は小坂神社（金沢市山ノ上町）が本務神

社となっており、兼務神社として平野神社（金沢市北方町）・白山神社（金沢市二俣町）・医王山神社（金沢市二俣町）・住吉神社（金沢市南森本町）・菅原神社（金沢市田島町）・八幡神社（金沢市清水町）・春日神社（金沢市清水町）・春日神社（金沢市神宮寺）・市瀬神社（金沢市市瀬町）・砂子坂神社（金沢市砂子坂町）の10社がある（注3）。

瓦の特徴

さて、牧山町で採集された熊野神社の瓦は、すでに述べたように鬼瓦2点と巴瓦1点である。これらに対して、便宜的に瓦1・瓦2・瓦3の番号を付し、個々の特徴について詳しく見ていくことにしよう（注4）。

瓦1（図2、図3）

瓦1は、赤瓦（赤い鉄系釉がかかった釉薬瓦）の鬼瓦である。ほぼ完形品で、高さ30.9cm、幅61.7cm、厚さ13.5cmをはかる。釉の色調（注5）は7.5R4/1暗赤灰色、胎土の色調は10R6/8赤橙色を呈する。各所に亀裂が認められ、作りは比較的粗めである。胴に葉を模した装飾が付く「若葉鬼瓦」（注6）の類であるが、典型的な「若葉足付鬼」とは異なり、刻線で葉脈を描いた



図1. 熊野神社の位置図（国土地理院タイルに神社名等を追記して作成）。



図2. 瓦1の実測図・3D画像.



図 3. 瓦 1・2 の各部写真.

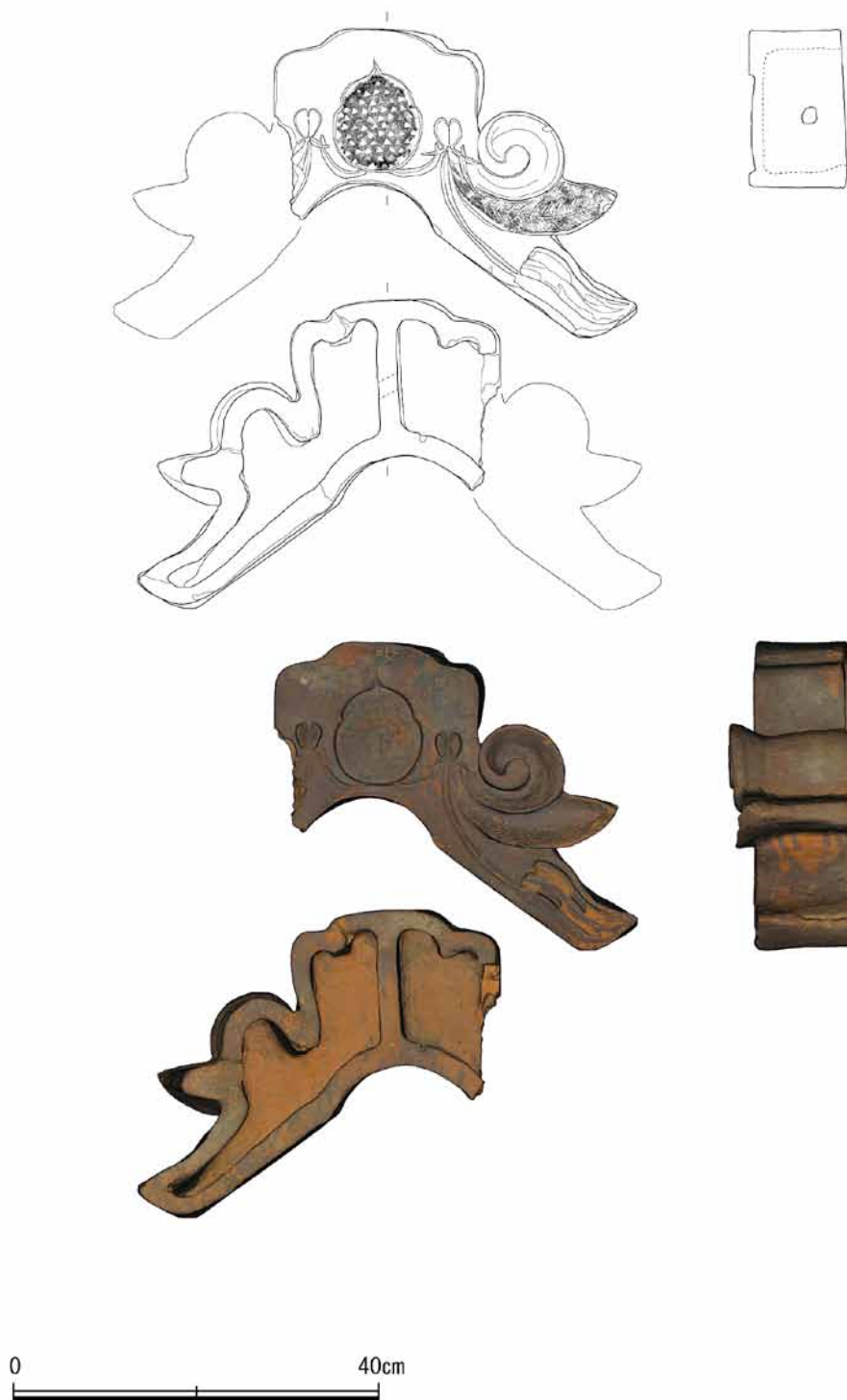


図4. 瓦2の実測図・3D画像.

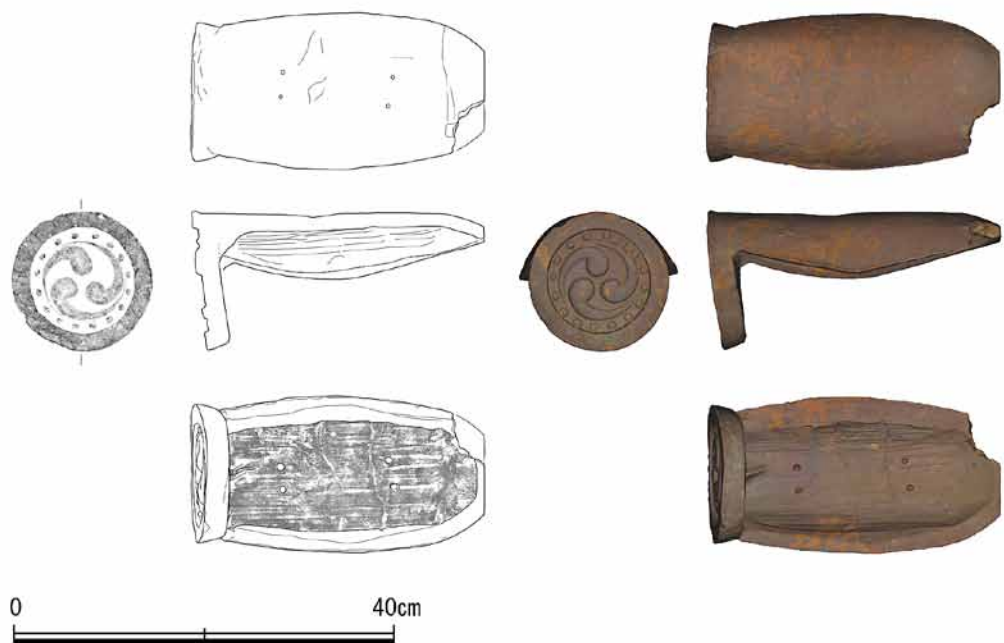


図5. 瓦3の実測図・3D画像・各部写真.

大きな葉形装飾が1枚ずつ胴の両側に配される上、足の内側が丸く挟られた「跨鬼（又ぎ鬼）」となっている。すなわち一種の「若葉跨鬼」で、さらなる特徴としては頭の中央の宝珠形凹部を埋めるように多数の三角形陰刻が入り、その両脇には猪の目文（ハート形の文様）が刻まれている。左右の足には、それぞれ3条の太い刻線が走っており、特に内側の1条は頭の両脇の猪の目文に接している。また裏面中央の縦板部分には、横から孔径20 mmほどの円孔が穿たれている。

瓦2（図3、図4）

瓦2は、瓦1と全く同種の鬼瓦（赤瓦の若葉跨鬼）であるが、こちらは向かって左側の足を欠いている。高さ34.0 cm、残存幅39.9 cm、厚さ13.5 cmをはかり、瓦1よりも若干高さがある（逆に、幅は57.5 cmほどだったと推測され、若干短い）。釉の色調は7.5R4/1 暗赤灰色、胎土の色調は10R6/8 赤橙色を呈し、やはり粗めの作りである。頭の宝珠形凹部（有三角形陰刻）や猪の目文、胴の葉形装飾（有葉脈状刻線）、足の刻線、裏面の円孔等も同じであり、瓦1・2がともに熊野神社の屋根の両側で使用されていたことがうかがわれる。ただし、瓦1・2をよく見比べると、頭の三角形陰刻のパターンが一致せず、胴の葉脈状刻線の本数も異なることから（瓦1の側脈：左21対・右22対、瓦2の側脈：右16対）、両者は同範瓦（同じ範型で作られた瓦）のような関係ではない。

瓦3（図5）

瓦3は、瓦1・2と同じ赤瓦であるが、鬼瓦ではなく巴瓦である。より詳しく言えば、「面戸付き棟巴瓦」である。ほぼ完形品で、長さ30.9 cm、幅16.5 cm、瓦当径15.0 cm、瓦当厚さ2.7 cmをはかり、釉の色調は7.5R4/3 にぶい赤褐色、胎土の色調は2.5YR7/8 橙色を呈する。2点の鬼瓦同様、作りは粗めである。瓦当文様は周縁が素文（無文）、外区が16個の珠文、そして内区が左三つ巴文である。巴文は、前の尾部が次の巴頭部までの長さとなっている。体部には2つ組の円孔（凹面側の孔径7～8 mm、凸面側の孔径3～4 mm）が2か所穿たれている。さらに体部凹面を観察すると、接合痕・調整痕といった製作痕跡が良く残っている。

以上のように、牧山町で採集された熊野神社の瓦は、いずれも赤い鉄系釉がかかった赤瓦の類で、瓦1・2が若葉跨鬼、瓦3が面戸付き棟巴瓦に分類できる。時代（年

代）としては、個々の特徴や熊野神社の由緒等から判断して、3点とも近代（20世紀前半）に位置づけられよう。

歴史的・文化的位置づけ

金沢市牧山町で採集された熊野神社の瓦3点は、近代（20世紀前半）の赤瓦であり、年代的には新しいものであることから、古代瓦・中世瓦に比べれば希少価値は低いと言わざるを得ない。少なくとも、この年代の瓦が、中世までを主たる対象とする埋蔵文化財として扱われることは少ないだろう（注7）。

しかし、各種屋根瓦の中でも端部のみに使用される、相対的に数が少ない鬼瓦・巴瓦の類であり、しかも3点中2点がほぼ完形であることから、大量に使用・廃棄される平瓦・丸瓦・棧瓦の類よりは間違いなく貴重なものと言える。土地に根差した神社で使用されていた瓦であることなどを勘案すれば、牧山町の地域文化史の上ではむしろ十分に歴史的・文化的価値を持つものと言える。黒瓦ではなく、近世以降の越前や加賀で知られる赤瓦を選択していることだけでも、使用当時の状況を示しており、注目に値する。

赤瓦について、もう少し詳しく述べると、北陸地方では、近世に入り越前で赤瓦の生産が始まり、近世後半には加賀・能登でも村々の社寺で越前瓦が葺かれるようになったという。近世後半の南加賀では、小松市八幡・蓮台寺といった地元でも赤瓦が生産されるようになって普及が進み、加賀市などでは今でも古民家に赤瓦が葺かれた地域が知られる（加賀橋立・加賀東谷が好例）。その後、明治以降になって、南加賀を除き黒瓦が普及していったとされる（木立、2001）。

このような北陸地方の瓦色の変遷から見ると、熊野神社の赤瓦は、近世後半以降における赤瓦の社寺普及の流れを汲むものということになるだろうか。里山地域の神社に赤瓦が使用されたという点では、近世後半に村々の社寺で越前瓦が葺かれるようになったという話にもつながるように思える。ただ、近代の牧山町における赤瓦葺きについて記した文献資料等が確認できなかったため、20世紀前半の熊野神社において赤瓦を選択した本当の理由は分からない。少なくとも、森下川沿いの緑豊かな環境の里山地域の景観において、当該瓦資料の赤は鮮やかに映えたことだろう。

歴史ある神社では、葺き替え後の旧鬼瓦を敷地内に飾

ることもある。当該瓦資料も、牧山町の地域遺産の一つとして大切に後世に伝えていけば、歴史の積み重ねの中で価値が高まっていくものと思われる。瓦に限らず物的資料は、一度失われてしまうと戻ってくることはまずない。そう考えると、熊野神社の瓦が採集されたことは稀有な例であり、牧山町の中で改めて保存・活用方法を検討すべきであろう。

神社のものではないが、金沢大学医学部記念館（注 8）には熊野神社の鬼瓦に似た赤い跨鬼（明治 45（1912）年竣工の金沢医学専門学校舎のもので同校の校章入り。筆者と同じ箇所を計測したかは不明だが、高さ 44 cm、幅 80 cm、厚さ 16 cm であるという）が収蔵されている（寺畑・赤祖父・山本，2009）。比較的新しい近代の鬼瓦でも、しっかりした施設で保存されている例として挙げておきたい。

今後葺き替えや修復のたびに屋根瓦全てを保存することは現実的ではないが、例えば鬼瓦 1 点だけでもその都度保存するようにして、変遷を追えるようにしていけば（現在の熊野神社は、黒色の釉薬瓦）、近現代瓦資料（瓦の形態的特徴や製作技術の移り変わりを示す資料）としての利用価値が創出できるのではないだろうか。日本考古学においても、「近現代考古学」が年々高まり・広がりを見せており（鈴木公雄ゼミナール，2007；桜井，2019 など）、近現代瓦資料についても今後の価値向上は大いに期待できよう。

謝 辞

牧山町で採集された熊野神社の瓦について、田崎和江先生には大事な瓦の実物を 1 年間にわたってお預けいただき、じっくりと資料調査させていただきました。さらにその成果を、本誌に掲載していただいて本当に有難い限りです。その前提となる、神社の調査に携わられた市民科学のメンバーの方々にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、瓦の実測図・3D 画像作成にあたっては、北陸学院大学の小林正史先生、熊本大学の久保田慎二先生所有の 3D スキャナー（Artec Eva 3D スキャナー）とソフトウェア（Artec Studio 及び文化財ビューワー）を借用させていただきました。そのおかげで、作図の速度・精度をかなり向上させることができたことを明記しておきます。

さらに、査読者の方から、丁寧かつ的確なご指摘をい

ただき、それを受けて本稿の内容を充実させることができました。

なお、冒頭でも述べたように、本稿は、奥野正幸先生から当該瓦資料の存在を教えていただいたことがきっかけになっています。金沢大学資料館においても私の所属長として 4 年間に渡り多大なご指導とご厚情を賜りましたが、さらに特定の資料にじっくり向き合う貴重な機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。

注 釈

注 1 直近では、令和元（2019）年 5 月から 7 月にかけて、金沢大学宝町キャンパス内にある宝町遺跡の第 19 次発掘調査（調査面積 1,024 m²）を担当している。なお、同調査では、近世・近代の遺構（近世：溝・土坑・ピット等、近代：眼科病棟基礎等）・遺物（近世：土器・陶磁器・瓦・土製独楽・土人形・寛永通宝・漆器碗・下駄・曲物底板・箸等、近代：病院食器・ガラス容器等）が見つかり、令和 2（2020）年 2 月 6 日～2 月 28 日には、金沢大学資料館展示室にて令和元年度資料館×埋蔵文化財調査センター冬季連携企画展「財（たから）のまち!? 宝町一宝町遺跡第 19 次発掘調査速報展—」を開催した（金沢大学資料館，2020）。

注 2 石川県神社庁ウェブサイト <https://www.ishikawa-jinjacho.or.jp/shrine/j0119/>（2021 年 9 月 11 日閲覧）。

注 3 同上。

注 4 瓦の観察にあたっては、主に『古瓦の考古学』（有吉編，2018）、『金沢城跡石垣修築工事報告書—玉泉院丸南西石垣—』（石川県金沢城調査研究所編，2010）、『北陸の瓦の歩み』（社団法人日本セラムクス協会北陸支部編，2001）、『近世瓦の研究』（山崎，2008）を参考にした。

注 5 釉や胎土の色調については、農林水産省農林水産技術協議会事務局監修の『新版 標準土色帖』に準拠して、マンセル表色系と和名で記した。

注 6 瓦の種類（名称）については、碧南窯業株式会社『碧南窯業株式会社総合カタログ』等を参考にした。

注 7 埋蔵文化財として扱う範囲に関する原則として、文化庁は「1 おおむね中世までに属する遺跡は、原則

として対象とすること.」,「2 近世に属する遺跡については, 地域において必要なものを対象とすることができること.」,「3 近現代の遺跡については, 地域において特に重要なものを対象とすることができること.」としている(『埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について』平成10年9月29日付庁保記第75号文化庁次長通知). 石川県においては, 近世～近代が埋蔵文化財の発掘調査および報告の対象とされている代表例として, 金沢城跡が挙げられる.

注8 金沢大学医学部記念館は, 金沢大学宝町キャンパス内にあり, 金沢大学の教育研究の発展, 関係者の親睦等を図るための諸会議・研修等の実施, 医学関係資料等の保管・展示等を行うことを目的として設置された施設である. 館内には資料展示室・プレゼンテーションルーム・学生自習室・若手研究室・学生実習室があるが, 展示室見学には事前連絡が必要である. 同館には, 膨大な医学関係資料が収蔵されており, 人体模型キンストレーキ(金沢市有形文化財)をはじめとするごく一部が展示されている.

文 献

- 有吉重蔵(編). 2018. 古瓦の考古学. ニューサイエンス社. 東京.
- 石川県金沢城調査研究所(編). 2010. 金沢城跡石垣修築工事報告書—玉泉院丸南西石垣—. 石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所. 金沢.
- 金沢大学資料館. 2020. 金沢大学資料館だより. 62.
- 木立雅朗. 2001. 石川県産瓦の変遷. 北陸の瓦の歩み. 能登印刷出版部. 金沢. 63-73.
- 桜井準也. 2019. 増補 ガラス瓶の考古学. 六一書房. 東京.
- 鈴木公雄ゼミナール(編). 2007. 近世・近現代考古学入門. 慶應義塾大学出版会. 東京.
- 寺畑喜朔・赤祖父一知・山本博. 2009. 金沢大学医学部記念館資料室収蔵展示品目録. 収蔵品調査プロジェクトチーム. 金沢.
- 社団法人日本セラミックス協会北陸支部(編). 2001. 北陸の瓦の歩み. 能登印刷出版部. 金沢.
- 山崎信二. 2008. 近世瓦の研究. 同成社. 東京.